

## 明治時代の蔵書のことなど

滝 沢 正 順

東京大学の蔵書の数はいうまでもなく日本の大学のなかで最大のもののひとつですが、その多大な蔵書は、上昇カーブを描いてだけ形成されたわけではないようです。蔵書が大きく減少した例として思い浮かぶのは関東大震災のときの火災ですが、『東京帝国大学五十年史』『東京大学百年史』の蔵書数の表を見ると、そのほかにも明治時代前半に蔵書数がその時期としてはかなりの減少をしたときがあって、他の学校へ本が移管されたりしたようです。

また、東大全体の蔵書数の変化には関わりませんが、学内の部局間での本の移動も当然あります。ただそうした個々の本の移動の詳細についてはわかりにくい点もあるようです。とくに明治時代ともなると、時間の経過や大震災などによる記録の亡失等もあって、とりわけわかりにくいようです。

そんなことを考えるのは、私のいる図書室にある単行本について、明治30年以前、つまり東京帝国大学という名称になる以前に東大(の前身校)に受け入れられたものを、受け入れた時期ごとに数えてみたことがあるためです。学科の図書室なので数としては相当にマイナーですが、結果は次の通りでした。

開成学校(第一大学区)	15冊
東京大学3学部	58冊
工部省工学寮	127冊
工部大学校	123冊
帝国大学図書館(明治19～26年)	42冊
帝国大学工科大学(書房)	111冊

帝国大学図書館(明治27～30年) 72冊

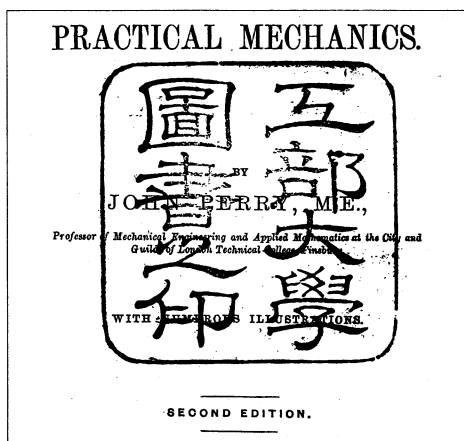
ほとんどが洋書で、発行は1800年代の受け入れ当時新しかったものばかりのようです。もっとも、書庫で古そうな本を開いて蔵書印や蔵書票で時期を調べるという方法をとったので多少見落としもあるはずですし、帝国大学図書館の登録の年は年度ではなく暦年で数えてあるので、若干あいまいさもあります。

それでも帝国大学の発足した明治19年以前については東京大学と工部大学校の両方の系統の本があり、明治19年以後については帝国大学図書館と工科大学(書房)の両方の本があるわけです。このことが仮に工学部(工科大学)全体にあてはまるとして、いつ頃からこうなったのかは必ずしもはっきりしないようです。みた資料に限られるためかもしれませんが、すくなくとも、明治19年に2つの系統の本がまとめられ、その後の時期は2つの図書館で工科大学におく本の登録を分担していた、というわけではないようです。

『帝国大学年報』をみると、明治19年から22年までの間については帝国大学図書館と工科大学書房の間の本の移動がわかりますが、帝国大学図書館から工科大学へ移動した数は年に数冊から約300冊までです。この時期の工科大学の蔵書数は1万5千冊と2万冊の間なので、移管された本は割合からすれば多くありません。また、工科大学で使用するために新しく受け入れる図書について登録作業を分担したというのも、蔵書印や蔵書票が不統一なのをみると考えにくいように思われます。

そうすると、東京大学系統の本や帝国大学図書館で登録された本はいつ頃移管されてきたものなのだろう、というふうに疑問がわいてきたりします。

もっともこうした点に関しては詳しい方がおられるのかもしれませんが、また、本の移動だけを問題にするのではなく、どのようにして移管する本が選ばれたのかとか、その結果が利用者にとってどうであったのかといったことがまず最初にあるのはもちろんです。そしてそうしたこともふくめて、現在ある蔵書がどういう歴史的な経過をたどって今ここに



あるのかというのは、本の内容的な価値とはまた別の興味ある問題です。とくに、成立の古い部局や組織の改編等のあった部局は、きっとそれぞれに曲折があるのですが、時間が何十年も経過してしまうと詳細がわかりにくくなってしまうこともあるようです。

(たきざわ まさのり・工学部機械系3学科  
図書室)